

第三十四地区第六分所鎮魂記

静岡県 皆川 伝治

軍隊という無法組織にも国家という理念の後ろ楯があった。けれどもわきの下の毛などまで剃られ、蚕棚に並べられてしまった捕虜たちには、もう明日がなかった。

そんな中で彼ら二人は、人間性の回復を置土産に炭鉱労働の犠牲者として立派に死んで言った。

その一 坂本経幸 二一・六・一一没 熊本県

四月も半ばを過ぎると大地も大気も和らぎ、病人休養者までが二号兵舎を出てアリのようにもぞりと動き始めた。

するとある夜、稲田と内山の二人が水道工事の溝を伝って収容所から逃亡した。五月十日だったと思う。清水、矢田両曹長が井上通訳と夜にまぎれて宮門から逃亡した。彼らはやがて日ならず捉えられて、手足を縛られ

て返って来た。

昭和二十一年六月十一日坂本経幸が南方坑で死んだ。

南方坑というのは、廢坑に近い坑で、入り口から八百メートルばかり直進すると左へ五百メートル、これがこの坑の主坑道であった。この五百メートルの斜坑道をツリナッツと呼んでいた。みな老人と女子労働者で馬や手押し車で採炭していた。坑から石炭を運び出すのも馬で、坑木を立てるのも割るのも手斧（タポール）一丁が道具のすべてであった。手掲げのカンテラランプをたよりの採炭であった。

坂本経幸はツリナッツの斜坑道を坑木を担いで歩いていた。手掲げカンテラの油替えに回ってくる身知り越しの女が線路の脇で休んでいた。十数メートルを歩き過ぎた。「ゴーツ、ゴーツ」炭車が流れてくる。地底の轟音が凄まじい。「いけねえ」おれ一人やり過ぎても、あの女が危ない。彼は担いでいた坑木を枕木に差し込むと数メートル後方へ突っ走った。そして、運命の中で瞑目した。「わぁッ」一切の光と音が瞬時にして消え失せた。坂本経幸は即死だった。

次の日、収容所でも驚いたが、南方坑の炭坑長と油替えの女が収容所へ弔問に顔を見せた。捕虜の命だつてとうといものだと知つたらしい。坂本経幸の死はむだではなかつた。ようやく明るい炭坑生活の道が開けかけたのである。六分所全体の死亡者二百八十六柱のうち、それ以後の死亡者は十三人しかいないのを見てわかる。

その二 坂本 勲 二二・一一・一没 熊本県

日本陣がラワーといって、横払い式採炭作業に従事し始めたのは、二十一年七月ころからである。ラワーへはいる採炭夫は普通三十人くらいでズラリ横一列に並ぶ。すると、コンペアがガタン、ガタンと動き出し、石炭を送り出すのだ。それは地下に大きな洞穴をつくつてゆくと同じで危険度が高い。上層からの圧力で三寸丸太などは弓なりに曲がつてしまふ。ここへはいるとコンペアの音のほかに不気味な地鳴りの音がある。まさに坑内は地下の牢獄の鉄格子でもあった。

ラワーは前進する。前進したあとにできた空洞を人為的に落盤させていくのがクリピーシキの仕事であった。彼らは鋸と斧と二本の麻綱を道具に働く。鋸と斧を使つ

て杭木を一メートルくらいの長さに切る。そして、それを井げたに組んで空洞内へはめこんでゆく。これなら折れる心配はない。パリパリ、どこかで杭木が折れる。天井から砂がこぼれる。鋸を引いても死神が追いかけてくるようだったとは、同じクリピーシキの森島陸平の言葉である。

「ラワーコンパルシート。」日本語かロシア語か、はたまた英語か、コンパルとはロシア語で落盤のことらしい。南方坑、永里隊のクリピーシキ坂本勲は、二十二年十一月一日、落盤のため死んだ。救援隊が担架と小さな円びを持って幾組も編成されて入坑した。両手で岩盤をかき分けかき分け、大事なと思うと小円びで掘りながら進んだ。

二日ばかりでようやく発見したとき、坂本勲は、ロシア人イワーノフと折り重なり抱き合うようにして死んでいた。全身は汚れ、固く握りしめた指先は故国を思う「何か」を握っているように見えた。二人の死体は南方坑から一たん収容所へはいり、そして日本人墓地へ向かつた。

口ソ合同葬儀の感があった。日本人もロシア人もうなだれている。しかし、収容所長アントノフスキーはイワノフの遺体を日本人墓地に葬ることを許さなかった。日本人墓地の隣に日本人とロシア人の手によって埋められた。

それから数日の間、この2つの墓標にはロシア人の手によって花が飾られていた。

入隊から終戦までの回想

島根県 塚田 信雄

何といっても四十五年前のことであり、記憶をたどり、友人の体験をも参考にして記述した。

私は昭和二十年三月十五日終戦の年、最後から二番目の初年兵として黒河省瑯璁、満州第六二二部隊へ現役兵として入隊した。そしてわずか三か月の速成教育のうち、一期の検閲が終わりホットする間もなくソ連の来襲に備え、三十キロくらい離れた孫吳よりの二站（ニタン）

の山中で陣地構築にはいる。

時はすでに二十年六月末になっていたが、部隊の主力は汗みどろで毎日壕掘りの最中であり、原隊は留守の兵員がわずかに残っている程度であった。作業は機械は全くなく、円び、スコップ、ツルハシ等を使用しての人力のみである。方法は山頂及び中腹に散兵壕（深さ二メートル、幅一メートルくらい）を幾重にも掘り、そのところどころに溜まり場として数人が寝泊まりできる程度の穴を掘り、その上に周辺に生えている白カバ、ナラ、クヌギ等の雑木の丸太を渡し、その上に葉のついたままの枝でおおい、さらにその上に土を盛り、芝を張り、草や木の枝をかぶせ、上空から見てもわからぬようカモフラージュをする。床には土間に丸太を並べ、葉のついた小枝や乾草を敷き、ベットの代用とした。まるで古代人の住居そのままである。電気もなければ水もない、ローソクとランプだけの雑魚寝の兵舎で、朝六時から夕方日が沈むまで掘り続けた。運よく土の多いところに出会えば一人で三―四メートル進むが、岩石の多いところは一日中ツルハシを主に使い、作業効率も半分以下である。